

松本寛二先生追悼

金子敏男

松本寛二元中高部長が一九九三年八月十八日に亡くなられた。享年七八歳であった。

松本先生は一九七一年四月から一九八〇年三月まで神戸女学院中学部・高等学部部長を三期九年間勤められた。松本部長の直前は、中高部の部長職は空席で、有賀院長が兼任しておられた。有賀院長は部長代行を一年されたあと、松本先生という人材を発掘されたのだった。同志社大学の文学部神学科を出られた後、経歴としては三十年間共同通信社の記者をしてこられた教職経験のない校長ということで、県庁に対しては、初めの五年間は有賀・小宮・岡本の各院長が代行するという形で対応した。

松本部長の登場は、中高部に非常に新鮮な空気を持ち込み、学内に形式ぶらないなごやかな明るさを大いに増幅した。就任当初の革命的といえる変化を、加藤元中高部長（当時の教頭）はつぎのように振り返っておられる。まず部長室が一変した。事務所と教員室の間にあった部長室は最短距離の通路となった。部長室を生徒のために開放した。生徒が部長室で弁当を食べていたので、部長と内密の話をする場所がなくなつたこともあった。歴代部長の写真が図書室にかけてあったがとりはずさせた、などなどである。生徒に訓戒を授けるような場面では、苦渋に満ちた表情で仕

方なくその場に座っておられたという。松本部長は普通の校長や管理者に期待される威厳・権威・規律というものは縁遠く、またそれらのものに価値も認めなかった。

「松本スタイル」には賛否両論あったが定着した、生徒をニックネームでよぶ中高部長など過去にいなかったのではないだろうか。生徒の目から見た先生像を、現教員のある人は次のように話した。「とても気さくで温かいお人柄でしたので、私たちにとって部長室はとても親しみやすい開かれた場所でした。先生に聞いていただきたい話がある」と、数人で無遠慮に押しかけていきました。先生はいつも温かい笑顔で、『なんだ、いってごらん。』と親身になって私たちの話に耳を傾けて下さり、なんでも相談できる父親のような存在でした。」「聖書科の授業では、よく例え話の紙芝居を見せていただいたのですが、それも一般に売られているものではなく、手作りで、誰が作ったのだろうかと思議に思ったものでした。先生のお人柄そのままの、とてもやさしい口調で話されたことが印象に残っています。」これは別の現教員のＪ一のとときの思い出である。例年、宗教強調週間には早天祈禱会が一週間ある。あるとき可愛いＪ一の祈りがとぎれずにひとしきり続いたことがあった。先生のご指導があったからであらう。

教員から見た松本部長については、十中八九の人の口から善し悪し両方の意味で「型破り」という言葉が飛び出してくる一方、誰彼となく暖かな人柄で親しく接していただいたことが指摘される。料理がお上手で、キャンプでの焼き焼きコンテストのときなど助けてもらった話とか、学期末の生徒の成績の計算を悲壮な気持ちでしていた教員が、部長に算盤を入れてもらい助かった話などは無限にできそうである。飾り気のない先生から生徒との接し方を身をもって教えられたという教員は多い。

音楽にまつわる逸話は部長には尽きない。「大波のように神の愛が」を始め第二編の讃美歌を好んで教えられた。PTAコーラスの組織や、学外では同志社グリーククラブのOB会の世話、ザルツブルク音楽祭の常連であったことな

どなど。ある朝ブラームスの讚美歌（第二篇五九番）を歌ったあと「昨日はカラヤンのブラームス（ベルリン・フィル）を聞いてきました」と礼拝の講話を始められたことなども印象深く語られている。

講堂での礼拝講話はよく準備され、分かりやすく若い人々の心を捕らえたものが多い。それらは三冊の著書にまとめられている（『あふれる愛の中で』創元社一九八〇、『愛のしるし』新教出版社一九八四、『神様はお急ぎにならない』新教出版社一九八六）。

教職とのかかわりにふれてご自身の口で言われたことがある。「これだけは絶対にやりたくない、という職業が二つだけありました。そのひとつは、新聞記者でありもうひとつは先生といわれるのがいやな、いわゆる教師業でした。ところがどうでしょう。その絶対にいやだ、と思っていた二つの仕事は、結局は、私の生涯の職業となってしまうってことに私の私になった。：しかし、神様が、おまえはこの道を進むべきだとして、大嫌いだったはずの道を選ばせたのであったとしたら、やはり、私の答えはこのやり方しか無かったし、これからも、たとえそれが短い期間であったとしても同じくふれあいの出来る教育者でありたいと思うのです（「ふたつのまちがいが」東洋英和小学部母の会主催講演）。」

松本中高部長はまさに生徒とのふれあいに生命を見いだした教育者であった。

（史料室専門委員）